

Graded Direct Method Teachers' Group

News Bulletin

第 25 号

英語教授法通信

1973年 5月30日

編集・発行・英語教授法研究会 事務局 東京都世田谷区豪徳寺 2-27-19 吉沢美穂方 TEL. (429) 5929

Basic English と翻訳について

室 勝

実際のな話を少ししてみようと思います。
まず次の日本語を読んで、それに対応する
Basic English の文を考えてみてください。

- ① 彼がふともらしたことばが、いったい誰の何を指しているのか、わたしには思い当らなかった。
- ② そのようにして、ぼくたちは出会い、語り合い…そして別れた。
- ③ 彼自身は、その方面ではまだぼんの駆け出しだと言っている。
- ④ きのお等はこの部屋に、いまにもわたしを閉じ込めようとした。
- ⑤ この材料で何か作れるかもしれないとわかったら、彼はけって手をこまねいてはいません。
- ⑥ がまんできずにげらげら笑ったりするのは、行儀のいいことではありません。
- ⑦ わたしはきょうは休みだから、少し庭いじりをしようかと思う。
- ⑧ 彼はペンを借りたいと言ったが、ぼくは貸さなかった。
- ⑨ すんだことにくよくよしないで、ぼくたちといっしょに楽しもう。
- ⑩ その教師には大家らしいところがあるて、われわれに畏敬の念をいだかせる。

左の文の中には、Basic English に書きかえることなどできそうもないと思われるものがあるかもしれません。それはどの文を見ても、指示内容だけでなく、情緒や、態度や、意図などが読みとれて、それが目につく結果、full English であればむしろたやすく書き直せるのではないかと考えるためでしょう。このように読みとれるものをすべてそのまま(?) 英語に書き直してみようとするのは、横すべり翻訳または水平翻訳とでも言うべきものです。これが悪いというつもりはありません、現に良い翻訳とされているものは、ほとんどすべてこの方法によるものでしょう。しかしこれでは語対語、うまくいっても句対句の置きかえによって翻訳は可能である、いやこれで完全であると思込込んでしまう人があるかもしれません。ところが異った言語間の関係はこんな単純なものではありません。このような翻訳だけに終始しては、少なくともコトバというものの基本的な性質を見失ってしまい、意味論的訓練を自分に課すことなどとても不可能です。その上このやり方では受容言語の色彩に自分で眩惑されて、一見みごとな文ができ上っても、原文にはなかった夾雑物がまよい込む可能性が大いにあるわけで

す。

これに対し下降的翻訳または垂直翻訳とも言うべきものは、できる限り指示の内容のみをうつしかえようとし、コトバのその他の機能は、それに伴って推測されるにまかす方法です。具体的に言えば Basic English に訳す練習をしてみることです。このことから生ずる効果——自己訓練の効果——は、わたしの「歯切れの悪い」説明では伝えることはできません。自分でやってみるほかありません。

受容言語として、わたしが考えている目的に合致しているのは、今のところ Basic English だけです。だから、「翻訳」という一般的な語を使って、話を進めてきたのは、少し不適當であったかもしれません。しかし英文和訳のばあいにしても、上に述べたような方針で、受容言語となる日本語を少し努力して工夫すれば、原文の理解と、言語そのもののすがたを会得するための、翻訳に用いる、自分の基礎日本語が、たとえばんやりした形であっても、見いだすことができるはずですよ。

参考のために、はじめにあげた日本語の Basic English 訳を書いておきます。もちろん Basic English 訳といってもいくつもあるわけですから、これはほんのその一例であると考えて下さい。

1. In my memory there was nobody to whom his chance words might be pointing.
2. That was our meeting, our talk and our parting.
3. He says himself that he is still a learner at the first stage in that field.
4. Yesterday they came so near to getting me boxed in this room.
5. He will certainly not keep his hand back if he sees a chance of making something out of this material.
6. It is against the rules of good behaviour to give way to uncontrolled laughing.
7. This is a free day for me, and I have an idea of doing some work in the garden.
8. He made a request for the use of my pen, but I did not let him have it.
9. Don't be troubled by the thoughts of what is done, and have a good time with us.
10. The teacher has an air of authority and makes our heart full of fear and respect.

内言としての英語

東山 永

帽子をかぶった男の人の絵を見て E T P 13 ページまでの英語で次のようなことが云える。That is a man. That man is there. His hat is on his head. etc. これを実際のクラスで見た S さんは次のような事を云った。

「GDM で習った人が大人になった時意味のない事を思いつくま、なんでもしゃべるようになったら困りますね。」まだ GDM が英語教師の間によく知られなかった頃のことである。その時私は啞然としました複雑な気分であった。

或る絵、物、situation を見て生徒が云えることはなんでも言わせるとそんなことになる。Sさんは思ったのだろう。幸い私の経験ではそんな人は出なかった。

GDMで英語を習う10才前後となれば頭の働きは大分進んでいる。しかし英語を日本語で説明して知識だけを与えても言葉としては何の役にも立たない。初歩に於ては目に見える、掴める具体性のあるものから入らなければならぬ。生徒は自分の手を、足を動かしてtake, goの動作をし、教師と他の生徒のすることをよく見、聞いてその意味を捉えて初めて口による表現ができるようになる。それから文字、reading, writing となるが音、意味、文字とのつながりがむずかしい。しかしこのようにからだで得た英語はしっかりと頭に入り、やがて頭の働きに応じて内言語として使われるようになる。

ETP (English Through Pictures BK-1のこと) では単語、文のgradingが、形式と意味共によくできている。具体的なものはやがて抽象度の高いものに移り、また大ざっぱに表現したものが個々の物へと及ぶようになる。しかし教えるとすれば出された料理をたぐおしいと食べるようなわけにはいかない。教師の気持が生徒にそのまゝ伝わるのは恐い程である。私が初めてgetを教えた時のことである。生徒が“あ、わかった”という表情を見せてくれなかった。自分が分っていなかったから。それからgetを夜を徹して考えた。そしてgetをgetした時のよろこびは忘れられない。Atも同じ経験をした。

どのような教材、道具、situationを使うかということは教師がちがえばそれぞれちがうのは当然のことであるが、語のroot senseを掴み、その展開、比喻を考えてその気になって探せばよい。また与えられたsituationを生徒はどのように表現するか、初歩に於ては具体的、外面的な事であるから大体同じよ

うな文になるが、進んだ段階では生徒それぞれの知識、興味、性格、環境が表れてくるようになる。それは既に内言語として英語が使われてきていることである。そして次のような生徒の作文を読んだ時、教師として目指しているものが間違っていなかったという確信を得たし、Sさんにしても最初の杞憂は泡のように消えることだろう。

About Columbus

Columbus made the discovery of America in 1492. He wanted to go to India. He thought the earth was round but other people of the time thought it was wrong. And some people went through the land to the east. Columbus went west and west. He went across the sea to a new land, which he thought India. It was not India. The people on the land were named Indians by Columbus. He did not know how far it was from Spain. His dream was not realized but his thinking was right.

(中学3年生 ETP 218ページまで)

The Sun

The sun is a great ball of fire. The distance through the sun from one side to the other is 864,000 miles. The distance between the sun and the earth is 93,000,000 miles. It sends out light in every direction. Anyone has never gone to the sun because it has great heat and it is very far from us. We need its light and heat very much. Flowers are open with its light and heat. We get up when the sun comes up. And the bright sun makes our heart bright and makes us happy. We keep living because of the sun.

(中学3年生 200ページまで)

音韻習得の難易度測定について

中郷安浩

日本人に英語を教えるとき、正しい英語の発音を聞かせているにもかかわらず、日本語的な発音がかえってくる。このとき *interference* がおこるという。

Interference はひとり音韻のみならず、*syntax*, *vocabulary* などにおいてもおこる。外国語がうまくできるということは、それだけこの *interference* の度合いが少ないということである。GDMはこの *interference* があまりおこりえない教授法である。

日本語では「ジャバラ」(古い写真機の「蛇腹」と思う人もあるだろうし、大阪は阿倍野のノミ屋を連想する人もあろうが)の「バ」を [ba] と言っても [va] と言っても、「ジャバラ」は「ジャバラ」にかわりはない。逆に *ballet* と *volleyball* は日本語では「バレエ」となって区別がつかなくなる。もっとも前者の場合は「バレエ」と表記する場合もあるにはあるが、口にのせれば同じ。

外国語の音韻を教える場合、ある音韻が母国語のどの音韻ととりちがえられるか、どういった影響をうけるかをあらかじめ知ることはなかなかむずかしいことである。母国語と習得すべき外国語の音素表をくらべてみたところで、必ずしも簡単に、しかも確実にある音か母国語のある音に代用されるということとは言えない。ましてや、どの音が習得しやすいとか、さらには、どの音がどの音よりも難易度が高いとか低いとかを予知することはとうていできっこない。

従来、外国語の音韻を学ぶ際におこる難易度は(1)母国語と対象外国語の音素の比較、(2)

これら音素に属する異音、(3)それぞれの言語体系内における範疇の分布を分析し、母国語の任意の音韻が対象外国語のある音韻に似ていればそれだけその音は学習しやすいと思われる。そして、それを仮説として、いろいろな *contrastive analyses* が、なかんずく、構造言語学の手法によって、行われてきた。その多くは音素的段階 (*phonemic level*) での研究で、そこでたてられた難易度の *hierarchy* も実践的というよりは、むしろ理論的な考察をもとにしたものが多かった。

Robert Lado は *Linguistics Across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers* (1958) で日本人が *think* の /θ/ を /s/ で代用することを構造言語学的に説明しようとしたが、どうもすっきりしない。

音素的段階だけで理論的な分析にもとずいて、ある音が母国語のある音に部分的に似ているから習得しやすいというような記述ではあまりにも簡素化されすぎている。日本人にコンテキストをまったく与えないで、アメリカ人の *Time* という語を聞かせてそれを再現させたとする。この語頭の /t/ は、音声学的には舌尖を上歯茎につけて、強い気音をともなった [t^h] なのであるが、日本語の /t/、つまり、舌尖が歯ぐきではなくて、歯のうら側についた、そして気音をともわない [t] で反応する多くの人に加えて、日本語の /c/, /p/, /b/ や、英語の /θ/, /d/, [t], [p] を用いる少数のものがあるという事実は、*contrastive analysis*

だけでは予知できないことを示している。

難易度の hierarchy を精密に記述しようとすると、どうしても音声学的段階でそれぞれの調音特性 (articulatory features) を勘定に入れて行なう必要がある。音素的段階で、対象外国語のいくつかの音を「新しい」音素だから難かしいとしてしまうのは misleading がある。日本人にとって「新しい」と思われる /l/ や /θ/ や /v/ にしてもその間に難易の差があるはずだし、日本語の音に部分的に近いから習得しやすと思われる /m/ や /n/ や /s/ も音声学的に見れば英語音とまったく同じではないこともあるし、それぞれの難易度もちがってくるし、また、これらのうちの一つが、/l/、/θ/、/v/ のどれかよりも習得し難いことだってあり得る。

Eugène Briere の A Psycholinguistic Study of Phonological Interference

(Mouton, 1968)⁽¹⁾ は以上を前提として、UCLA の monolingual な学生 20 名を被実験者に選び、LL に入れて、アラビア語、フランス語、ヒンディ語、ヴェトナム語からなる混成言語を学習させた際に、起る phonological interference の研究である。

紙面の都合で深く立入ることができないのは残念であるが、Briere は McGeogh のためた「被実験者が連続して習得した二つの反応組織は回想の際にも有効である」という仮説から、二つの反応が同一あるいは類似の刺激や関連性をもっておれば、より強い方の反応が起るという competition of response theory, Underwood の唱えた一つのことを記憶したあとに他の作業を行なうとこれが前に記憶したことの再生を妨げる逆行抑制、第 1 の作業が第 2 の作業を妨げる前進抑制、そして Jenkins の発表した divergent (発散性), convergent (収斂性), unrelated (非関連性) から成る learning structure で母国語が与える影響についての研究⁽²⁾をふまえてい

る。

Briere が, Jakobson, etc. の弁別の特徴 (distinctive features) だけにたよらないのは, distinctive feature としての調音特性を認めることは音素論をとなえる人たちの simplicity と economy を満足させはするが, 困難度を決める際に重要と考えられる情報を見おとす危険があるし, nondistinctive features こそが対象言語の困難度を決めるキーとなるからである。

Briere の方法を日本人の中学生にあてはめて実験してみると次のような事がわかった。

1. tin と city における [t^h] と [t] では [t^h] の方がむずかしい。調音点は両方とも歯ぐきだが、前者はさらに気音をとまう。[t] に [t^h] を用いた者が多かったが、逆行抑制が働いていたといえよう。

2. hedge と car における /ʃ/ と /r/ では /ʃ/ の方がむずかしい。調音点に関して言えば部分的類似は /ʃ/ の方が日本語に近いものがあるといえる。contrastive analysis だけでは予知できないものの例である。他の音とくらべた場合、この二つの音は少くともこの位置では hierarchy の中ではかなりむずかしいところに属する。

3. bad, feed, food の /æ/, /iy/, /uw/ では /iy/, /æ/, /uw/ の順でむずかしくなる。/iy/, 非常に易しく、/æ/, /uw/ は非常に難しい。難易差は有意的である。/iy/ は日本語の /i/ に緊張を加えればよいのに対し、/uw/ は日本語の /u/ を緊張させてもだめである。日本語の /u/ はかなり前寄りの母音で、これに緊張だけを加えようとすると [ü] となるからである。/æ/ に対しては日本語の /a/ が圧倒的に多い。

4. thin, they, vase, face, late の /θ/, /ð/, /v/, /f/, /l/ では数字の上では /ð/, /f/, /l/, /v/, /θ/ の順

でむずかしくなるが統計学的には難易差はあまりつけられない。hierarchyからいえば、これら5つの音は中間あたりに集中している。このことから、いわゆる「新しい」音が最も難かしいものとは断定できないといえる。

教室で発音をうんぬんする場合、経験的に日本語と大きくちがっている音がむずかしく思い、したがって、ややもするとそれらに指導の注意が集中しがちであるが、日本語によく似る音でも音声学的には非常に習得し難いものがあることは上にのべた通りである。

最後に誤解のないように一言申しそえたい。

たとえばtinの / t / は [t^h] で氣息音を伴う歯ぐき音というようなことを述べたが、教室でこのようなことを知識として教えることが得策だとは思っていない。英語の時間は音声学の時間ではないのだから。有名な音声学でも発音の下手な人があるのは誰でも知っている。しかし教える側で音声学の知識は欠くべからざるものである。それにもまして大切なのは、教える側が常に正しい発音を用

いることである。

註

*本稿は拙稿「日本語の音韻がアメリカ英語の音韻習得に及ぼす影響」(「人文研究」第20巻、第7分冊、大阪市立大学文学部)を下敷きとしている。

(1) これは、Briereの“An Investigation of Phonological Interference, “Lan-guage, Vol. 42, No. 4, 1966に加筆して単行本としても。したのもの。

(2) たとえば、発散性構造だと、同じ刺激に二つ以上の反応がでると、そのすべてにinterferenceが期待され、その程度は反応の非類似性の程度によるというもの。具体的には、ヒンディ語(H)を学習するアメリカ人にとっては無声閉鎖音のAE / p / と / H / / P / および / p^h / は、

$$AE / p / \begin{cases} H / p / \\ H / p^h / \end{cases}$$

となる。つまり、英語では[p]と[p^h]は異音であるが、Hでは2つの音素であるから、アメリカ人にとっては学習が発散性となる。

近日入荷御案内

カラフルな児童向け絵本

The Faber Book of Children Songs (Faber)	予価¥ 1470
〃 〃 Nursery Songs (Faber)	予価¥ 1940
〃 〃 Nursery Verses (Faber)	予価¥ 1440
〃 〃 Nursery Stories (Faber)	予価¥ 1620

International Society for General Semantics

出版の意味論関係の図書も近々入荷予定。目録ご希望の場合当社に直接お申し込み下さい。その他Basic English関係の図書も多数取揃えています。

株式会社 スクール・ブック・サービス
〒112 東京都文京区小石川5-2-3 Tel. (815) 6341

G.D.Mの紹介

I. A. Richards と C. M. Gibson によって開発された外国語としての英語教授法である。Graded Direct Methodの頭文字をとり普通 G. D. M と呼ばれている。

小学校3年生から教えており、又成人のための英語教授法でもある。又これに関係のある理論などを研究し、日本の英語教育の改善に貢献することを目的としている。

第二次大戦中、一時帰国中の東京女子大学教授 Constance Chappell 女史が Harvard 大学で、I. A. Richards のもとで Graded Direct Method を学んだ。1947年、Chappell 女史帰日。東京女子大学卒業生の子供たちのクラスをこの教授法で教えたのが、日本における G. D. M. の誕生である。そのクラスを見学していた吉沢美穂ほか数名が、同女史の指導のもとに G. D. M. による授業を始めた。1950年、I. A. Richards 来日。1951～1952年、現在の代表者吉沢美穂、Harvard 大学に留学、I. A. Richards, C. M. Gibson のもとで一年間 G. D. M を研修。1952年、第一回の G. D. M. 講習会を開催。以後毎年講習会を開き、これが現在の Summer Seminar に発展した。月例研究会もこの頃から始まり、現在も続いている。1957年に第一回の Bulletin 発行の頃には、事務局、会計、プログラム委員などが必要になり、会としての形を整えてきた。

1958年、一般を対象とした広報活動として第一回公開講演会を開催、以後毎年一回、1972年は第15回になった。

1965年、会員の片桐ユズルが東京から神戸に転じたのを機会に、関西支部が形成された。現在英語を教えている人、および英語を教えることに興味のある人は誰でも入会できる。

年会費（9月から翌年8月まで）1,000 円で入会の手続きは、年会費と共に、住所、勤務先、姓名を書いて希望する支部に届ける。

会員には Bulletin, newsletter, 会員名簿（年一回発行）、会合やセミナーなどの通知出版物の通知などを送り、セミナーなどの参加費割引の特典もある。現在の会員数は、各支部合計で約 450 名。又鎌倉を中心に集りやすい人が作っているグループがあり、約 50 名が独自の活動をしている。その他名古屋、金沢、京都、奈良、広島、北九州、新潟、福岡、熊本など、組織的なグループではないが研究や活動をしている任意のグループがある。特に正式な会則などは定めず、会員全員が平等の立場で研究や活動をしているし、会員以外の人が活動に参加することも自由である。ただし、会の運営に必要な最小限度の責任者を選出し、選ばれた人は、一年間無報酬で奉仕することになっている。

事務局所在地は下記の通りである。

東京支部

〒154 東京都世田谷区豪徳寺2-27-19

吉沢 美穂方

Tel. 03-429-5929

関西支部

〒655 神戸市垂水区多聞台火の蔵409

松蔭女子学院大学英文研究室気付

(注) これは“日本英語教育改善懇談会”

(1972年11月23～25日、東京八王子の大学セミナー・ハウスで行なう)での
ンフレットより箕田が要約したもの。

春の Advanced Seminar 開く ('73 報告)

学校の春休みを利用して、本年(1973年)も野口英世記念館で3月26日(月)～3月28日(木)の3日間、朝9時から午後5時まで27名の参加で行われた。この集まりは、少なくとも、'72年度の夏のセミナーに参加し、各自で実践してきている人であるので、それぞれのdemonstrationもすばらしく、その批評も鋭かった。

本年度のSeminarの特徴は、

- (1) EP-1のp.65から後
- (2) ポイントとなることを、割当て(割当てしたのは吉沢美穂さん)
- (3) Free talk と称してガヤガヤする時間を設けた。

といったところにあった。Demonstrationは“今まで人がやらなかったこと”をと“こらない”で生徒に教えるつもりでやること、前もってgradingをよく研究して、その項目がどこにあるか、既習事項は何か、など勉強してやること、などをモットーに進められた。

第1日目

- ☆ when (conjunction) (唐木田照代さん)
- ☆ what (relative) (堀井鷹子さん)
- ☆ who (relative) (黒川忠美さん)
- ☆ make (溝口寿美さん)
- ☆ keep (斎藤直美さん)
- ☆ for (鈴木美千代さん)
- ☆ a bit of (馬嶋治男さん)
- ☆ different, the same. (杉崎聡子さん)
- ☆ which (rel. obj. case) (小林久子さん)

第2日目

- ☆ let (高野きくえさん)
- ☆ How much (long) …? (升川 潔さん)
- ☆ where (relative) (成井幸子さん)

- ☆ enough (みか川嘉孝さん)
- ☆ why …? because (小川和子さん)
- ☆ as … as, not as … as (山田初裕さん)
- ☆ nearer, farther (箕田兵衛さん)
- ☆ may (高橋美智さん) (3年ぶりに出席)
- ☆ if (永野美恵さん)

第3日目

- ☆ how (小林久子さん)
- ☆ seem (山田和歌子さん)
- 午後は東京の月例会と合同
- ☆ Gerund (東山 永さん)
- ☆ Self (升川潔さん)
- ☆ be able to (山田初裕さん)
- ☆ narration (吉沢さん)

各demonstrationsの技術を細かく再現できないのが残念だが、今回は昨年にくらべ技術面で新人の向上が目立った。

ここでcommentsをひろってみると

- ① SEN-SITをはっきりとさせるには、contrastをつけることが大切。そうするには、その語の root-senseを正確につかんでおくこと。
- ② なるべく少ない教具でもって、それを十分に利用し、いろいろと生徒に表現させることができるように工夫する。
- ③ 教師はあまりオーバーな動作をして“ゴッコ”的にならないように。

最終日には、東京の月例会の参加者と、3日間参加した人たちといっしょにビールで乾杯。御殿場のSummer Seminarでの再会を楽しみに解散。厳しい3日間ではあったが、厳しさの中に、家族的なふん囲気がありアツという間にすぎってしまったという感じであった。

(夔川記)

おとなのくらす

岡 部 幸 枝

京浜急行の上大岡という駅の近くにある。石油プラント関係の会社で、早朝8:00A.M.～9:30A.M.まで、週二回英会話入門クラスAと称して、G. D. M. で英語を教えています。

G. D. M. で英語を教えて得られる利点は、いろいろあると思われるが、その中の一つに手持のことが、少くとも、場面に即して、多くの事が言えるようになるという事が、あります。その点を、すでに英語教育(?)を6年～10年以上も、受けた人達に、身体をもって知っていただくというわけです。

そうすれば、仕事の中で必要な時、何もむずかしい単語を、頭をかゝえて探さなくても手持ちの単語で、話ができるようになるのではないかと思うのです。

大人を相手に、まず、I. You. He. She. It から始めます。大体E. P. のp. 120～p. 170あたりまでを、その時のクラスの状態や、進み具合に応じて4～5ヶ月で終了し、それに肉づけをするわけですから、まず最初の時間は、take. put. あたりまでを、割合細かく気をつけて、Gradeに添って、1時間半でぶとばします。

すでにこのあたりは、相手は習ったことのあることばかりですので、Speedy に終るようにしますが、それでも何回か、外人相手に商談のひとつもしたことのある人ですら、“a”の導入に驚き、put. takeの使われる範囲の広さに驚いているようです。実際に、Mr.—, You will take the picture off the wall and give it to Mr. B. の指示のあとでは、自分で動作と英語を確認しながら、I'm going to Mr. B. I'm giving the picture to Mr. B. その人達の顔といたら、生まれ始めて英語と自分の動きが一致したという

感じで、満足そのもの(?)で一步、一步ふみしめながら、I'm going ~なのである。

時には、G. D. M. に悪のりしすぎて、言葉をもて遊ぶ時もあり、クラスが落語の時間になり、爆笑の渦に包まれることもある。make. keepのあたりで、技術屋に物をいわせて、ただThe air-conditioner makes this room cool. では終らず、エアーコンディショナーの構造などを微に入り細に入り、説明し始めて、What makes this room cool. のプロセスを説明してくれる。そうなる時、ここではこちらは聞き役であるが、彼らのTechnical termsの多い話に疲かれてくる。Mr. S said to me, “You made us tired and hungry.” I said to him, “You made tired and hungry. I'm afraid I'll not make you go out of this room.” Mr. K— “Mr. M and T are not hungry now.” T— “Why?” “They had 50 yen Soba and 15yen eggs just before they came here to this class.” Mr. T— “50yen Soba and 15yen eggs made us full and happy and they kept us full.” すかさず Mr. S— “50yen Soba and 15yen eggs made them full and fool.”

こんな具合である。

このあたりまでくると、そろそろG. D. M. の動詞の制限も忘れかけて、いいたいことをいえば良いという方向のみ、彼等は大事にしているようである。

又、二度目のクラスの時、関係代名詞のところがうまくいかず、どうしてもwhichをひき出す事ができなくて、困らされたことがある。よく見てみると、彼等は、頭の中で一度ひっくり返して、意味を考えていたらしい。それで又、具体的な動作に戻して、部屋の中にあつたカレンダーを利用して

A went to the wall.

A took one calender off the wall. He

gave it to B. B went to the table with it and put it on the table. The calendar is on the table now. C took the other calendar off the wall and he came back to his seat with it and put it in his bag. これだけの動作を通して、できる限りの which を使った文をいわせてみたら、本当にわかったようであった。それでもこの時間のあとで、whichは、会話の中でも使う事があるのですか、と質問された人があり、関係代名詞は、読む文の中でしか、とらえてなかったのではないかと思われ、彼の質問の意味が本当は、どこにあったのかしらと、時々思い出される。

4～5ヶ月が終ると、Native Speaker によるクラスBに進むわけであるが、この頃になると、いろいろな話題をつかまえては、Free Talking も多くなり、自分達から話題を持ってきて、話そうと考えてくれて、いきなり難かしい事を話さなくては、という気持はだいぶとれて、まず当り前の事から話し始めてという気持になるらしく、こちらの考えている一つのことばの、もとの意味はどういうところにあるのか、本当はどういう意味、どういう動作なのかと彼等も考えるようになりその点でも、少しは効果があったかと思う。

G. D. M. をやっている時、お互いに楽しいのである。

現場から

箕田兵衛

毎日3時間、4時間の授業をしていると、ときどき生徒とかみあわない時がある。例えば体育の次の授業、午後からの授業、教師が疲れていることもあれば、生徒の方が落ち着いていない時もある。ベルが鳴ればとにかく教室にかけ込まなければならぬ。先日こんなことがあった。一枚の絵を見せてよく発言する生徒(ついつい最初に指す生徒はよく出来る生徒を指してしまう)に指したが、彼は口をがっちり閉じたまま一言も発言しない。30秒位待ったが、目つきがいつもと違うよう

だ。こちら待ちきれなくなって、次の生徒に指した。とその時彼はようやく口を開きそうになったが、次の生徒が発言したので黙ってしまった。その時の彼のくやしそうな顔付きが今でも思い出される。あと3秒待てば彼は発言したに違いない。あとで聞いた話によると、休み時間に友達とケンカをしたらしい。我々教師はこんな時に彼は言えなかったという評価を下す。しかし彼の頭の中には言いたかった文章があったに違いない。

別のクラスで、教室に入って何も言わずに一枚の紙を見せたらとたんに“あ！テストだ”と一人の生徒が言った。どうも生徒の頭の中には紙＝テストというむすびつきが出来ているようだ。教師の方はその紙で飛行機を作って、go - come をやろうと思っていたのだが… 生徒の頭の中の配線をなんとか変化に富んだものにしたいものだ。

生徒とかみあった例の一つ。教室に入って行くとき黒板に私の似顔画が画いてある。その横に He is Minoda と書いてあり、女生徒は、くすくす笑っている。さっそく聞いて見た。

T : Who put this picture on the blackboard ?

P : Mr. Takahashi put it on the blackboard.

T : (Mr. Takahashi に) You are good at putting the picture.

彼はここにこしている。実はこの生徒は45分の授業の間じっと坐っているのが耐えられない生徒であり、勉強は今迄全然興味を示したことの無い生徒だ。しかしそれから目は輝かして発言するようになった。

あまりムダのない授業は教師と生徒の心の結びつきをかたくなにするものだ。それは教え込むことになり、生徒自らの創造力を押えてしまっているのではないだろうか。頭の中でころがしているコトバこそ自分のものだ。そのコトバが外に出ると教室のワクの中で使われる先生対生徒のコトバになってしまう。

「意味論と外国語教育」を読んで

小川 和子

この本は片桐ユズル氏が1958年から72年にかけて、教育について書かれたエッセイのうち18編を一冊にまとめたものである。ある人はこの本はとてもやさしいからと奨めてくれた。別の人はとてもとてもむずかしい本だと教えてくれた。“コトバは現実のほんの一部しか伝えない。”教科書の一ページの教え方、一時間の授業の進め方などを含めて例をたくさん出して具体的に話を進めているので一見とてもやさしい。しかしその底に流れるものは、意味論を足場にして現在のコトバ万能文化に対して一撃を加えるものであり、真の教育のとるべき道を示すものである。

我々英語教師—コトバを教える人—が最も心しなければならぬ事のひとつは、コトバがいかに無力かを自覚することである。現代は活字信仰、マスコミ信仰、そしてコトバ信仰があり、新聞にのらなかった事、テレビニュースでとりあげなかった事は価値のない事だと思いきむ人が多いが、とりあげられなかった部分にこそその本質があることが多い。コトバにならない思想はない。文字にならないコトバはないと思っている人が多い。しかし地図は現地ではない。現実のすべてを報道しつくすことはできない。コトバは常に何かをいい残すものである。いい残した事、こぼれ落ちた事を意識したとき、人はことばを注意深く正しく使おうと心がけるようになる。

このいい残し、こぼれ落ちに気付かないと話し合いができない。そればかりでなく悪用されるとコトバが実力以上に働き出し、迷信狂信、ファシズムへの道につながる。ヒトラ—や、オウエルの小説「1984年」がその例である。言語能力の高い人程コトバの魔力—プロ

パガンダ等に動かされやすい。「教育の重要な目的のひとつはコトバに対する不信の念をいつも忘れさせないようにさせること」である。

真の教育とは何か。教える側に教えたい欲求があっても教わる側に学びたい動機がなければ教育は成立せず、かえって有害でさえある。教育の主体は国家、教師、親といった教える側にあるのではなく、学ぶ本人にある。教育とは引き出すことである。それはあまり大きな組織ではできない。徒弟制度的に、非コトバ的に教える。コトバの束縛を離れて自分の目で耳で体で何が大切かを確かめさせる。料理でも大工仕事でも何でもよい、自分でやらせる。専門家のうたをきかせるのでなく、自分でギターをひいて自分のうたをうたわせる。その中から自分の持っているものを発見し、引出し、伸ばす、教師の仕事はそれに手をかしてやる事だろう。

このような観点からGDMを考えると興味深い。GDMではverbal explanationを排し、SEN-SITで導入する。それもlive situationでなければならない。生徒は諸感覚を同時に働かせて理解し体得してゆく。教師はしかつめらしい顔をしてはいられない。自分自身をあらわし、生徒の目を見つめ心を引出しながら授業をつくり出してゆく。機械的にteaching programme通りにやってはゆけない。先生はできるだけ少くしゃべり、生徒ができるだけたくさんしゃべる。それも単なるrepetitionではなく、situationを自分の立場で切りとっての発言である。

T : I will go to you.

S : You will come to me.

限られた手持ちのコトバでどれだけ多くの事

がいえるか体験すると同時に situation から sentence を作る時いかに多くの事がいい残されるか、ことばをいくら重ねても現実をえがきつくすことはできないという一般意味論を毎時間体験する。こうして自分のコトバで自分の考えをあらわすことができるようになってくる。

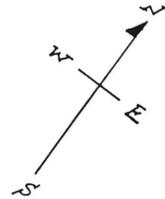
「彼の本は絶対他人の紹介や批評からではうかがい知ることのできない、つまり自分で問題意識をもって participate しなくてはな

らないものである。」これは片桐氏がマクルーハンの著書についてのべた文である。そして「意味論と外国語教育」を紹介することばとしてもふさわしいように思われる。

“意味論と外国語教育” 片桐ユズル著

A 5 判 220 ページ 定価1200円
くろしお出版

～にゆうず ニュース にゆうず～



東京支部・鎌倉グループ

(月例会)

この月例会は会員相互の情報交換の場として大変有意義であるばかりでなく、参加者同志が日常抱えている疑問点の解消と、新たな指導技術の取得及びGDMの論理的背景を追求するため各分野の知識の交換を主な内容としている。

例会はおおむね、DemonstrationとLectureあるいはBook Review等から成り、Demonstrationは実際にGDMを導入している中学校の教室を開放したり、小学生グループの授業風景を参観したり、型式は様々であるが、参加者が生徒の代りをつとめる、いわゆる

「体験授業」ではいろいろとハプニングが見られる点でGDMを志す会員には極めて有益である。又Demoの後行なわれる Discussionでは「良いDemoほどAdviceが多い」という原則が守られ、いつもかなり舌戦が展開されている。

LectureはDiscussionで興奮した会員に新たな興奮を与えている。最近の例では、東京女子大学短期大学助教授 升川 潔氏の

「Kernel Sentences (核文) の効用」、2回にわたっての早稲田大学教授 牧雅夫氏の「The news-heart in a regularly weighted statement」、精華短期大学教授 片桐ユズル氏の「意味論について」等が挙げられる。この例会が単なる教授技術のみの習得に終らせないためにも今後興味ある題目で続けて行かれなければならない。又Book Reviewでは、会員に紹介したい本、興味を持って読んだ本、教育にたずさわる者に直接、間接関りあいのある本のReviewを行なって来た。最近では「English for Tomorrow」(新英研刊)「子供の心」(国土社刊)等を取りあげた。この分野での会員の積極的な活動が更に望まれる。

② Basic English 研究会

Basic English 研究の重鎮、早稲田大学教授 室 勝氏を中心に約20名の会員が毎月定例の研究会を持っている。GDMとは切り離せないBasic Englishを様々な角度からとらえて、その論理と実際について、Full Englishへの書きかえ、文学作品のBasic Eng-

lishによる翻訳, Book Review等, 内容は専門的かつ高度で, 多岐にわたった活動が地道に行われている。会員の一層の参加を求めている。

③ Advanced Seminar

本年度3年目を迎えるこの催しは, それまで, Spring Seminar (Preliminary Seminar) と呼ばれ, 夏の全国的催しである Summer Seminar の下準備として開かれていたものを昨年より, Advanced Seminar と名称を変更し, 参加条件をGDM経験1年以上, Summer Seminar参加経験者, そして現在GDMを実施中の者という厳しいものとし, GDM trainerの養成を主目的とするようになった。

④ 公開講演会

GDM英語教授法研究会の活動を一般に紹介する場として例年5月に開催されるこの催しは, 本年度16回目を迎えた。客員による, Lectureと, Demonstrationで構成され, 一般に対するGDMの正しい認識とその普及を目的とし行なわれて来た。これまで多くの批判と称賛を受けながら, 順調な歩みを続け, 特に近年は参加者が急増し, 会場の設営, 運営に苦慮する状況からも, 広く認識の輪が広がりがつゝあるものと考えられる。

「発表力をつける授業作り」(1972)

「生徒の立場に立った授業」(1973)等のテーマのもとに実際のクラスによる公開授業, 参加者が生徒の代りを務める「体験授業」パネルディスカッション, 講演等, 趣向をこらしたプログラムで, 毎年学界に話題を提供して来た。

⑤ GDM東京支部・鎌倉グループ合同例会

東京支部から分離独立した鎌倉グループと東京が, 毎年4月に共催する月例会, 鎌倉という地理的条件から湘南, 鎌倉地方の会員を中心に結成されるグループが年一回実践の報告の意味を含め, 鎌倉婦人子供会館で開催さ

れる。独自のTeachers' Training, GDMによる授業の成果の発表の場として独自の地位を築いている。活動の拠点として鎌倉婦人子供会館を持つグループの発展は素晴らしい。

⑥ Project Teamによる諸活動

近年, 支部内有志による幾つかのProject teamが発足し, それぞれのテーマにそって, 活動が進められている。主なものとしては
(イ) EP Book II のGDMによる教授技術の開発
(ロ) Basic Englishによる対訳活動
(ハ) Reading materialの作成
(ニ) 学校教科書に対する自主教材の開発
(ホ) EP Book I のOperation words の用法別分析, 分類等が挙げられる。なにぶん, 本業のかたわらすすめる活動ではあるが, 具体的成果も幾つか報告され地道ながら確実な歩みを続けている。

関西支部

☆ ひとのこと

○会員数, 207。4月20日現在。男性が極端に少ない。タノシサとサビシサあり。

○片桐ユズルさんが, 神戸(松蔭女子学院大学)から京都(京都精華短期大学)へ移った。

☆ ほんのこと

○毎月, 第1金曜日に読書会をしている。主として, Herbert Kohl, John Holtを読んだ。5月は梅棹忠夫「知的生産の技術」(岩波新書), 6月はJames Herndon: How to Survive in Your Native Land (Bantam)を読む。motivationを持って読みたい。細見律子さんが世話人。

☆ したこと&すること

○1月に, 東京と関西のJoint Meetingを大阪の箕面の山頂でやった。研究交換と懇親の二兎を追って逃さず。来年は名古屋で東京勢のやっかいになれる。

- 3月に Beginners' Seminar をした。
- 4月に、鎌倉の東山さんの応援を得て、Advanced Seminar, Kansai を初めてすることができた。来年もやる。
- 6月に公開講演会をする。テーマ「ゴッコではない言語活動は可能か」。原口庄輔（大阪市立大）さんのお話がある。

☆ していること

- 毎月1回、Staff Meeting がある。関西各グループの情報収集、企画・運営の打合わせ。GDM の root sense を身につけた人の集りはかくあるべし。
- 金沢、京都、奈良、呉、広島、九州、etc. の各地でセミナーが盛ん。わが世が来た!?

名古屋支部

南山ファミリー Y M C A (名古屋) では従来 Oral Approach の理論をもとにして小学生英語を進めていましたがいろいろな問題にぶつかりもっと入門者に適した方法を求めているところ一昨年の夏始めて東山荘のセミナーで GDM に会うことができました。早速担当主事の協力を得て、升川先生にお願いして名古屋で始めて GDM の Beginners' Training を開き、昨年の4月より全クラスに GDM を採用しました。

今春でやっと1年の GDM 経験です。ふりかえてみると1日目というのは大変な年だと思いますが、私達の質問の手紙をテープに吹込んだお返事を下さり絶えず協力下さった升川先生をはじめ、東山荘のセミナー、advanced seminar などの先生方のすばらしいクラスや適切な advice に助けられて少しづつですが名古屋でも GDM の芽が出たところです。毎月1回送られてくる関西支部ニュースもとても楽しみで各地の活動の様子に触れ心強い気持ちになります。

今年の3月に2度目の Beginners' Training を持ちました。升川先生の人間味あふれる

ご指導のおかげで3日目には参加者もすっかりうちけてふれあいの多い3日間でした。あの demonstration がある限り人は心を開かないではいられなくなるようなところが GDM のよさだと思います。そのあと名古屋 Y M C A の先生方と合同で2日間 demonstration の会をすていよいよ本番の新学期が始まりました。今年は月1回の講師会にはお互いのクラスを参観してその内容について話し合うことにしています。初めは前で動いている先生が気になりますが、その内生徒1人1人がじっくり見えてきてとても参考になります。また今年は読書会もできるのではないかと期待しています。東京や大阪のように身近に相談できる経験者や先生方がおられないので心細いのですが升川先生の言われた stand on your own feet という言葉を思い出して努力したいと思っています。

金沢支部

“子供といっしょに”

林屋増子

「あれシートイレにヒートイレ!!」うれしそうにそう叫びながら、講師室の外をかけて行く新入クラスの子供の声に思わず講師室にいた何人かの講師が「なる程ねえ! She toilet に He toilet かあ…」と笑い声とも感嘆の声ともつかぬ声をあげたのでした。やっと He と She を習ったところの子供たち…お手洗いにもちゃんと区別ができるのが嬉しくてたまらないのでしょう。女子用手洗いがシートイレ、男子用手洗いがヒートイレなんてとても生き生きして私はその日一日何度も想い出し笑いをしてしまいました。あの子はきっと毎時間毎時間出会う新しいことばに夢中になって自分の世界がそのことばによって少しずつ広がってゆくのを楽しんで仕方がないのじゃないだろうかとも思うのでした。英語を

全くしらない子供たちにひとつひとつ新しい言葉を与える……それが子供から生きてかえってくる…教える者にとって大きな喜びです。ある時は感心させられ…ある時はこちらも頭をかしげる様な珍しい表現が飛び出したり、何でこの子はこんな理解をしているんだろうと泣きたくなくなってしまったり…こちらが思いもしないことが子供たちから発言されるのは本当に嬉しいものです。今、3年生から継続の4年生のクラスを持っていますが、3年生にはGDMは早いということですので、1年間、ゆっくりゆっくりやってきました。理解の早い子供たちは知ってしまったことばに飽きてしまい自分達で新地開発にのり出し、“What”を教えていないのに、ある時、私の持っていたおもしろい袋物を見つけて「はてな is in the case.」と言いつつ出たのでした。何が入ってるんだろ…はてな…?…その子は“What is in the case?”と、とても言いたかったのです。What の導入には絶好のチャンスだったようですが、私は少々石頭なのかWhatはまだ先に教えることになっているのだからと思い、その場はみんなで楽しいねえと大喜びをして終わったのでした。子供たちはとても気に入ったらしく、その後もクラスで時々、「はてな…」を使う子供がでてきて私を苦笑させています。何か新しいものが受け入れられる時の状況の大切さをつくづく感じるのです。GDMにおける Situationの重要さは今さら言うべきことでもありませんが、はてな…という言葉が子供の口から発せられた時のクラス中にピーンとはりつめた時の何か…ああ そうだなあ… そうだ！本当だ!!という深い得心のようなもの… そういう何かが少しでも子供の中にあってほしい… あるようにしてあげられるようがんばらなくては…と思いつつ同時に、自分自身にもその何かが一層大きく深く強くなってかえってくるような気がするのです。子供とともに、学んでいるという実

感は何か無性に楽しい感じです。もうひとつの6年生のクラスは三年目の子供達なので、言葉も随分多くなり、言い出すこともバラエティに富んでいて仲々愉快です。子供も私もお互いに知っていることが一緒なのでから、競走みたいにして言うことを言い合ったりします。最後に私の方がチョットダケヨ…（こんなことも言えるんじゃない？）とリードすると「あー!!ほうやった（あーそうだったの金沢弁）」とくやしがっています。GDMで授業をしているととても確かな気持ちでいられて、それでものすごくおもしろいというのが私のいつも感じることです。

GDM こぼれ話

- 山田初裕さん 都立王子工業高より都立羽田工業高に転任。全日制にかわった。目下、中国語のGDMを研究中。
- 天野さん 現在アメリカで修業中。升川さんのところにきた手紙によると秋川高校を退職して、もう一年皿洗いをしガンバルらしい。冬休みはMexico にいったこと。Spanishを憶えてきたらしい。
- 黒川さん 9月に男子誕生。名前は雄君。アメリカ人から電話あり、How is yu-u (雄) ?といわれ奥様は目を白黒。春のセミナーでDemoをやり「ミル」から「ヤル」立場に変身。Teaching is believing を身をもって経験したとのこと。
- 馬嶋さん。Advanced Seminarのときに昼食の世話を一手に引き受けてくれた。お陰で歩きまわらずにすみ、最後の日には宴会の専門家・夔川さん（保守的ではないぞ）と協力して会食の用意をしてくれた。ドウモアリガトウ。
- 吉沢さん 日頃「恍惚の人」になったら教えてチョウダイ」といっていたが、Demoを始めたトタン、生徒が恍惚の人になり、なかには手に汗をにぎる人もいた。

Graded Direct Method Summer Seminarのお知らせ

とき : 1973年8月17日(金)~21日(火)
4泊5日

ところ: 東山荘(静岡県御殿場市東山)

講師 : 伊達民和(泉北高校教諭)

(ABC順) 東山 永(GDM鎌倉グループ代表)
片桐ユズル(京都精華短大教授)
升川 潔(東京女子大学短大助教授)
中郷安浩(大阪市大助教授)
小高一夫(松蔭女子学院大学講師)
山田初裕(羽田工業高校教諭)
吉沢美穂(ICU講師・GDM英語教授法研究会代表)

内容 : Graded Direct Methodの理論と実際を、小学4年~6年のクラスで実習したり討論しながら習得する。ほかに、スピーチ・クリニック、レクリエーション、特別プログラムetc.

資格 : 英語教育に熱意のある人、興味のある人ならどなたでも。公立中学校、高等学校の先生大歓迎。

費用 : 受講料 8,000円(ただし、教授法研究会会員は7,000円)

申込金 1,000円

宿泊料10,000円(4泊食事付)

計 19,000円、ほかにテキスト代

申込先: 申込金 1,000円を同封して7月31日までに(〒550)大阪市西区土佐堀通2丁目12 大阪YMC A英語学校GDMセミナー係
Tel. 06(441)0892

受講料、宿泊料、教材費は現地で納入して下さい。申込者には7月下旬にくわしい参加者要項を送ります。

定員 : 一般セミナー、初めての人(50名)
中級セミナー、経験のある人(30名)

共催: GDM英語教授法研究会
大阪YMC A英語学校

- 吉田さん 関西より東京に転居。さっそくいろいろな会に出席し、活躍中。
- 岡部さん 4月より区立目黒九中の講師となり中学1年を教えている。
- お茶の水にあるY.W.では、山田さんがクラスを担当している。美人ぞろいのクラスらしい!?! 山田さんのhelpをしたい男性が殺到している。
- 橘川さん 東京まで出てくるのは時間的に無理なので、神奈川支部を作ることを計画中
- 安齊さん 横浜の自宅を改造しGDMによる塾を開く予定。
- 藤本さん 4月から中学1年を担当している。月例会には逢えるでしょうね。
- 山下さん 結婚して夏目さんとなる。
- 小千谷中の池田さん 東京の例会に新潟

からヒョッコリ現われる。12月には小千谷でGDMの研修会が行なわれた。

- 横浜Yでは4月に研修会を行なった。杉崎さん、溝口さんが活躍中。
- 春のセミナーには久しぶりに玉川学園の高橋美智さんが参加。ナツカシイ!
- 根古谷さん 千葉付属中では2年の1学期末までE.P.I.を使用。千葉Yとも連絡をとっている模様。今後を期待!!
- 田村尚子さん 学校をやめ家事手伝いをしていましたが、再び中学校の講師となった。

編集後記

各地の活動がさかんで原稿も沢山集まり整理におおわらわでした。これも会員のみなさまのご協力の賜だと思います。

今後は、日本列島を縦断し、ミカガワガメモをとりに行きますぞ。